

From Me to We

はじめに

あなたは、家族・会社・地域とのつながりの中で、「やりがい」や「充実感」を感じていますか？それはどのような瞬間でしょうか？私たちは日々、「自分らしく生きたい」「自分の想いを優先したい」と願い、その想いが日々の行動の根底にあります。現代社会は、そうした一人ひとりの価値観や選択が尊重される時代でもあります。しかし、自分の想いや立場だけを優先してしまうと、他者と手を取り合い築いていく「本質的なつながり」や「ともに生きる喜び」を感じづらくなってしまふことがあります。青年会議所のメンバーもそれぞれの立場や価値観を持ちながら、「明るい豊かな社会の実現」という共通の志を胸に活動しています。私自身、青年会議所での活動を通じて「誰かと想いを重ね、ともに活動すること」の喜びを感じてきました。私が日々の活動で胸に刻んでいる一節があります。それは、ハーバード大学の名誉教授であったデイヴィッド・リースマンの著書『孤独な群衆』の中の一節です。「“伝統”から解き放たれた共通の価値観を失った現代人が、無力感・虚無感に囚われ、“孤独な群衆”となり他者への同調傾向を示すようになる。価値観の多様性。これを前提とした自由は皮肉にも人々に無秩序状態をもたらし、人間の画一化という結果をもたらす」この一節は、私たちが生きる現代社会の姿を的確に捉えています。多様性が重視される時代だからこそ、私たちは自らの行動の指針となる「共通の価値観」を見つめ直す必要があります。青年会議所には、長年受け継がれてきたクリード（信条）やミッション、ビジョンがあります。それは、国や文化を超えて、世界中の青年会議所メンバーが共有している価値観です。私たちは多様な意見や立場を認め合いながらも、この価値観を共有し行動の軸として据えることで「やりがい」や「充実感」を得ることができるのではないのでしょうか。

この問いは、組織に限らず、私たちが生きる現代社会全体にも通じるものです。現代では、個人の自由や尊重が重視されるあまり、他者とのつながりや共同体への帰属意識が希薄になりつつあります。例えば、世界最大級のPR企業のエデルマン社が提供するエデルマン・トラストバロメーターでは、日本人の半数以上が「社会的なつながりがもはや団結の基盤として機能していない」と感じており、OECD（経済協力開発機構）の国際比較においても、日本は「他者との交流がない」と答えた人の割合が最も高い国となっています。こうした社会では、「個」が満たされていても、「ともに生きる」実感が乏しく、幸福感や

安心感が得られにくいいため、社会全体の幸福度が低下してしまいます。この結果は、デイヴィッド・リースマンの唱える「共通の価値観を失った自由は、皮肉にも人々に無秩序と画一化をもたらす」に概ね合致しています。だからこそ、組織でも社会でも、個人の尊重と同時に、互いを思い支え合うことのできる前提としての「共通の価値観」について改めて考える必要があります。そして、この前提を持った上で地域の方々とつながり、ともに協力し合うことで、地域や社会全体に新たな希望を見出していかなければなりません。このようなつながりを築いていく主体は、特別な誰かではなく、まちをよりよくしたいと願う市民一人ひとりであり、明るい豊かな社会の実現を掲げる私たち自身にほかなりません。

青年会議所はまちづくり、ひとづくりを通じた社会参画への入り口です。地域や社会の課題に目を向け、自らの手で変化を起こそうとする若者たちが集い、ともに学び、ともに実践する場です。この営みの中にこそ、未来をかたちづくる力があります。そして、この組織の本質的な価値は、自己の利益ではなく、他者や社会のために尽くすことにあります。自らの時間や労力を投じ、誰かのために動いたその経験が、やがて自分自身の心をも動かし大きく成長する。私は、そうした奇妙な経験をした仲間の姿を目にしてきました。自身の達成感ではなく、誰かの想いを背負って流す涙。それは、自分を超えて、誰かのために尽くすことの尊さを知った証です。

福山青年会議所もまた、まちをよりよくする存在として、自らの成長を通じて地域に貢献することを使命としてきました。今後、私たちが地域から必要とされる存在であり続けるためには、私たち自身の満足感を充足させる事業ではなく、私たちが展開する運動を通じて地域に住まう人々の意識と行動を変えていくことが必要です。仲間と支え合い、地域と深くつながりながら、私たちはこれまでも、そしてこれからも、より良いまちづくりを目指します。このまちに住み暮らす一人ひとりが、「自分たちのまちは自分たちでつくる」という当事者意識を持ち、地域に住まう誇りと責任を抱きながら、次代に希望をつないでいく。そのようなまちを実現するために、さらなる一歩を踏み出しましょう。

挑戦できる環境、失敗できる文化へ

一人ひとりが挑戦できる環境は、厳しくも温かみのある組織風土が必要です。誰もが安心して意見を交わし、互いの違いを尊重しながら高め合う環境が整ったとき、組織は真にしなやかで力強いものへと成長していきます。どれだけ立派な目標を掲げても、メンバーが萎縮し、挑戦を恐れるような空気感では、組織は持続的に発展することはできません。私たちは、すべてのメンバーが自らの考えを発信し、他者の意見に真摯に耳を傾け、互いに刺激を与え合う組織環境をつくる必要があります。そのためには、日常的な対話を大切にし、信頼関係を深める努力が欠かせません。組織内に心理的な安全性が確立されると

き、初めてメンバーは本音で語り合い、違いを乗り越えて新たな価値を生み出すことができます。挑戦できる環境、失敗できる文化。福山青年会議所を、より挑戦に満ちた、より温かい、より誇り高い集団へと進化させてまいりましょう。

ともに見つけるまちの未来

福山には、十分に活かされていない資源が数多く存在しています。豊かな自然環境、交通の便に恵まれた地理的優位性、ものづくりを支える産業基盤、そして地域に根差した多様な文化。これらは、まちの未来をかたちづくる確かな土台であり、大きな財産です。しかし、それらの資源も、ただ存在しているだけでは、未来を動かす力にはなりません。価値ある地域資源を見つめ直し、社会の中で活かしていこうとする意思と行動が必要です。

私たち青年会議所のメンバーは、まず自らが地域と向き合い、学び、行政や諸団体と積極的に関わり、ともに汗をかくことを通じて、まちづくりの担い手であるという自覚を持たなければなりません。そして、その姿勢が共感を生み、市民の方々にもまちへの関心が広がっていくような運動を目指す必要があります。まちの課題を誰かに任すのではなく、自分たちの手で解決に導くことを、当然の責務として引き受けること。それこそが、青年会議所が地域社会の中で果たすべき本質的な役割だと考えます。

これからのまちづくりには、地域内の視点にとどまらず、国際的な視点を持つことも必要です。世界とのつながりを意識し、異なる文化や多様な価値観と触れ合いながら、自らの地域の個性を磨き、発信していく。昨年、ニューヨーク・タイムズ紙が発表した「2024年に行くべき場所」の第1位に山口市が選ばれたことは、地方都市であっても国際社会から高く評価される時代が到来していることを象徴しています。地域の資源を見つめ直し、福山ならではの強みを内外へ発信することで、新たな交流と可能性の創出を目指しましょう。自らの手で未来を描き、力強く歩みを進めるその意志と行動の積み重ねは、やがてこのまちの未来を拓く希望となるでしょう。

ともに学び、ともに挑む次代の共育

どれだけ社会が変わろうとも、夢に向かって歩む若者の存在に価値があることに変わりはありません。若者の成長は、地域の未来を切り拓く力であり、私たちの社会に新たな希望と可能性をもたらす原動力です。私には、4歳の娘と、生まれたばかりの息子がいます。日々、我が子の成長を見守るなかで感じるのは、一人ひとりが持つ可能性の尊さです。このまちのユース世代が、自らの力を信じ、夢や目標に向かって挑戦し、主体的に行動できる人財へと育てていくことを、心から願っています。そして、そのための環境を整え、支えることは、私たちがリードしていくべき重要な役割です。変化が激しい時代を生き抜くために必要なのは、知識や技術だけではありません。情報が氾濫しているなかでも、自ら考え、選択し、他者とも協調しながら行動できる力を身につけていくことが子どもたちの成長であり、ひいてはまちの成長につながります。

また、私たちは、一方的に与える存在であってははいけません。むしろ、ともに学び、ともに悩み、ともに成長していく存在であるべきです。まちの未来の担い手であるユース世代と真摯に向き合い、その夢や希望に耳を傾け、挑戦を心から応援する文化を、地域社会に広げてまいりましょう。彼、彼女らが描く未来に対して、私たち大人はどのように応えられるのか、その問いに正面から向き合い、責任を持って行動することが、私たち自身の未来を豊かにし、まち全体に新たな活力をもたらす第一歩となるでしょう。

志を同じくする仲間とともに

私たちの志を広げ、組織の理念に共感する仲間を増やし、組織全体の力を高めていく営みこそが、会員拡大活動です。単なる人数の増加を目指すものであってはなりません。どれだけ多くのメンバーが集まったとしても、理念を共有できなければ、運動の質を高めることはできません。理念に共感し、志をともにできる仲間との出会いこそが、私たちの運動をより持続可能なものにしていきます。住み暮らすまちに関心を寄せる人、自己成長を望む人、あるいは地域に貢献したいという想いを抱く人、そのいずれかに該当する方がいれば、その人はこれからの福山青年会議所とともに築いていく仲間です。

また、私たちが目指すのは、「誰かがやる」のではなく、「自分もやってみたい」と思える会員拡大です。拡大は特定の役職者に任せるものではなく、すべてのメンバーが自然に仲間を迎え入れる姿勢を持ち、日々の活動の中で青年会議所の魅力を語れるような文化を育てていくことが、私たちの目指す拡大の在り方です。このような文化のもとで行われる拡大は、「活動のための手段」ではなく、「この運動に共感してくれる人と出会いたい」という純粋な想いから取り組むことができます。会員を迎え入れることは、組織の成長だけでなく、自らの歩みを振り返り、次の世代に希望を託す営みにもつながります。

ただし、仲間が増えればそれで良いのではなく、その仲間がどのような活動を行ってほしいのか、どのような人財になってほしいのかを逆算して考え、組織全体で共有し、後押ししていく必要があります。福山青年会議所の門を叩く挑戦を決意したその気持ちに私たちは敬意を払い、向き合わなければなりません。全員が当事者として、育成にも取り組んでまいりましょう。

広がる出会いと価値観

出向者は、福山青年会議所の顔であり、学びの最前線に立つ存在です。出向とは、単なる経験の積み重ねにとどまりません。それは、自らの枠を超え、新たな価値観と出会い、多様な人々とともに活動しながら、視野を広げ、次なる成長への糧とする貴重な機会です。出向したメンバーが得るものは、個々の経験だけにとどまりません。そこで得た知見やネットワーク、挑戦から学んだ教訓は、必ずや福山青年会議所全体に還元され、組織の成長につながります。出向者の活躍は、外の世界において福山の名を広めるだけでなく、組織内にも新たな風を吹き込み、未来を切り拓く原動力となるのです。だからこそ、私た

ちは、出向者に対して敬意を持って寄り添い、彼らの挑戦と成長を支える体制を築いていかなければなりません。出向という大きな挑戦に臨むメンバーが、不安なく、誇りを持って歩みを進められるよう、組織全体で支援し、背中を押す環境を整える必要があります。また、出向を終えた後も、その経験が個人の中に留まることなく、組織全体の学びへと昇華されるような仕組みづくりが必要です。出向者の知見を組織で共有し、次なる挑戦の土壌を耕すことが、出向の意義をより大きなものにするでしょう。また、出向者の活躍の機会でもあり、メンバーが大きな学びを持ち帰ることのできる各種大会、とりわけ ASPAC (アジアパシフィックエリアコンファレンス) については、本年度は新潟の地で開催されます。国際大会が日本国内で実施される貴重な機会であり、大会招致を目指す私たちにとって、学び多き大会になることは間違いありません。Web を通じた各種大会への参加が可能となったものの、目で見て感じるものと肌で感じるものの間には大きな隔たりがあります。より多くのメンバーとともに青年会議所の運動を肌で感じにまいりましょう。

想いを「伝わる」カタチへ

運動は、ただ行動するだけでは完結しません。その意義や熱意、目指す未来像が、社会に向けて正しく伝わってはじめて運動となりえるのです。どれほど素晴らしい活動も、知られなければ存在しないのと同じです。だからこそ、私たちは広報という活動に、強い関心と責任を持たなければなりません。広報とは単なる情報発信ではなく、そこに私たちが描く理想や、日々の挑戦に込めた想いを伝え、共感を生み出し、さらなる運動の輪を広げていく必要があります。他者に伝えるために言葉を磨き、発信内容にいかに意味を持たせられるかが、広報活動の肝となります。そこに JC 運動の未来がかかっています。市民に対して、地域社会に対して、私たちがどのような存在であり、どのような未来を描こうとしているのか。そのストーリーを誠実に語りかけ、ともに歩いていく仲間を広げていくこと。それが、これからの広報に求められる役割であり、単なる告知や宣伝に留まらない、運動の一部としての広報の在り方です。

また、外部への発信と同時に、内部への広報も極めて重要です。メンバー一人ひとりの挑戦に目を向け、成長を讃えることで組織全体に希望と誇りを生み出すこと。内部に向けた発信は、エンゲージメントを高め、メンバーの一体感とモチベーションを育む大きな力になります。単なる情報共有ではなく、そこに込める想い、言葉の選び方、伝える姿勢一つひとつが、私たちの組織文化を映し出し、未来への道筋を描くものとなります。広報の在り方を磨くことは、すなわち私たち自身の運動そのものを磨くことに直結します。言葉と行動に責任を持ち、未来へのメッセージを力強く届け続けましょう。

挑戦を支える安定の仕組み

どれほど高い志を掲げたとしても、それを支える組織運営の土台が脆弱であれば、質の高い運動を展開できるわけもなく、信用も積み重ねることはできません。私たちが持続的

に運動を展開し、まちや社会により良い変化をもたらしていくためには、日々の運営の一つひとつに誠実に向き合うことが必要です。メンバーが一同に集う例会、そして諸会議こそ、私たち青年会議所にとって「志を同じうする者相集い力を合わせる」ことそのものであり、組織の調和と運動の根幹を為すものであると言えます。

縁の下の力持ちとしての役割には、本質的なリーダーシップが宿ります。表に見えない準備や調整、細やかな配慮の積み重ねは、表舞台上で語られる理念に現実味を与えます。それはまさに、組織の風土や文化を育み、次世代へと確かなかたちで引き継いでいく型と言えるでしょう。組織の信頼性は、表層に見える部分ではなく、こうした日々の地道な積み重ねによって裏打ちされていくものです。だからこそ、どのような活動であっても、そこに至るまでの準備、段取りの質にも私たちは目を向けなければなりません。議論を交わしながら英知を結集することで運動の効果を最大化させるべく、運営の在り方を追求してまいります。

未来を示す羅針盤

私たちが目指す未来は、待っているだけでは訪れません。私たち自身が意志を持って描き、行動することで初めてつくられていくものです。だからこそ、青年会議所におけるビジョン策定は、単なる目標設定ではなく、未来への約束であり、組織の存在意義を問い直す営みでもあります。2021年に策定した「2022～2026 JCI FUKUYAMA 未来ビジョン」は、組織としての明確なビジョンを持ち、メンバー全員が同じ方向に向かって行動することで、目指すべき社会を実現するという考えのもと策定しました。このビジョンは、これまでの私たちの歩みを方向づけ、多くの成果と学びをもたらしてきました。しかし、どれほど素晴らしいビジョンであっても、時代とともに変化する社会課題や地域のニーズに応じて見直し、進化させていく必要があります。未来を見据えるためには、過去を真摯に振り返らなければなりません。これまでの歩みを検証し、達成できたこと、できなかったことを見つめ、そこから得た教訓を次なる成長の糧に変えていく。その誠実な姿勢こそが、次代へと続く道を切り拓きます。

次なるビジョンは、一部のリーダーだけが描くものではありません。多様なメンバーの声を受け止め、異なる視点や経験を織り交ぜながら、組織全体でともに作り上げていくものです。誰もが自分ごととして未来を思い描き、ともに歩を進めることができるビジョン。それこそが、これからの福山青年会議所に求められる道標であると信じています。過去の延長線上ではない、真に未来志向のビジョンを描き直しましょう。そして、変化を恐れず、挑戦を厭わず、時代の先を見据えた道筋を明確に示し、次なる世代のリーダーたちへとつないでまいります。

挑戦をもたらすもの

大会を招致することは、組織の力を結集し、地域社会に新たな価値と誇りをもたらす、

大きな挑戦であり、使命です。自ら機会をつくり出し、未来へと扉を開くために、私たちはASPACの招致活動に取り組みます。大会を招致するということは、組織の運営力、調整力、発信力、そして何よりも一体感が問われる総合力の勝負でもあります。一人ひとりが自らの役割を果たし、互いに支え合いながら、ひとつの目標に向かって進む姿勢こそが、福山青年会議所の本当の力を社会に示すことに直結します。また、これらの取り組みは地域にとっても大きな意義を持ちます。アジア圏を中心に国内外から多くの人々が集い、交流し、このまちの魅力に触れる機会が生まれます。地域の文化や産業、歴史や人の温かさを伝え、福山というまちが持つポテンシャルを、広く発信していく絶好のチャンスとなるでしょう。

地域との連携を深め、市民とともにまちの未来を考え、取り組む機運を高める。その先にこそ、大会を招致する真の価値があります。招致活動に臨むには、強い覚悟と柔軟な発想が必要です。一筋縄ではいかない困難に直面することもあるでしょう。しかし、挑戦する中で生まれる一体感、壁を乗り越えたときの達成感は、何ものにも代えがたい財産となります。この挑戦を通じて、組織としての絆をさらに深め、地域社会からの信頼をより強固なものへと育てていきましょう。この大きな挑戦に正面から向き合い、全力で取り組むことこそが福山の未来をつくり出すための力強い一歩となりうるのです。

未来につなぐまつり

過去から続いてきたまつりは、地域の歴史や文化、人々の想いを体現する大切な営みであり、単なる催事ではなく、まちの「らしさ」を映し出す鏡です。まつりを通じて世代や立場を超えて人々が交わり、まちへの誇りや帰属意識が育まれます。その営みは、地域に活気と一体感を生み、住民同士のつながりを深める原動力となります。2023年よりばら祭における中央公園の企画・運営を私たちが独自に行い、新たなかたちで大いに盛り上げてきました。この挑戦は私たちに自信を与え、新たな可能性を感じさせる契機となりました。そして今後、このまつりを、どのように彩り、誰にどのような想いを届けていくのか。その問いに答えるのは、他でもない私たちです。先人たちが築き上げてきたこのまちの誇りを受け継ぎ、新たな可能性を模索し昇華させることで、次世代へとつなげていくのは、地域に根ざし、まちづくりの最前線に立つ私たちの責務です。まつりを通してまちに活力を、子どもたちに希望を、そして市民一人ひとりに誇りを届けてまいりましょう。

おわりに

技術が進化し、社会が大きく変わろうとも、未来をつくる原動力は変わりません。それは「人の意志」と「人とのつながり」です。未来に対する責任を胸に、互いを信じ、手を携えて前へ進むという意志。この意志こそが、不確実な時代を超えていくための支えとなるはずです。そして、私たちの想いが重なり、力が束ねられるとき、私たちはデイヴィッド・リースマンの唱える「孤独な群衆」ではなく、有機的につながり合い、真の意味で多

様性を活かすことのできる組織になりえます。私たちの挑戦がやがて波紋となり、まちに広がり、希望となっていく。その確かな手応えを感じられることを信じて、私たちは歩み続けます。今こそ、一人ひとりが誇りと覚悟を携え、ともに未来へ踏み出す時です。ここに集う仲間と汗をかき、想いを重ねながら、「From Me to We 私から私たちへ」ともにより良い地域をつくりましょう。